

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2013 年 8 月 1 日 発行
(通巻 458 号)

現代座レポート No. 55

- ・「出会いの街」無事幕が降りました (1)
- ・「出会いの街」 (2)
- ・NPO 現代座を支える人々 第 12 回 狩野和太郎さん (3)
- ・「蒼い空・友の呼ぶ声」長野県公演報告 (4) ~ (5)
- ・「遠い空の下の故郷」ハンセン病療養所に生きて (6)
- ・力行会で「アリアンサ移住地」の講座 (6)
- ・共生の大地・アリアンサ 木村 快 (7)
- ・お知らせ・新規・継続会員・寄付者のお名前 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987

「出会いの街」無事幕が降りました

木村快作「出会いの街」の公演は五月一六日(木)から二二日(火)まで現代座ホールで行われました。今回は少しでも多くの方に足を運んでいただけるように、六日間で九ステージの公演を行いました。

五〇〇人の方に見ていただくことを目標に、出演者も友人・知人に声をかけましたし、地元的小金井市では会員の皆さんだけでなく、商工会や商店会連合会をはじめたくさんの方が力を貸してくださいました。おかげさまで五三一人の方に見ていただくことができました。本当にありがとうございました。



「出会いの街」

は街の人たちが気軽に集まれる場所を目指している「カフェ・出会い」が舞台です。なんとか新しい街の絆をつくろうと苦闘している婦人グループや商店会の若手と、地域のことなんか考えたこともなかったタクシーの運転手が、アジアの子供を支援する活動をしている女性との思いがけない出会い

を通して、自分たちを見つめ直し、新しいつながりをつくっていくお話です。

本当に何気ない日常を描いたお芝居ですが、客席では涙をぬぐう姿があちこちにありました。「こんな場所が、ぜひこの町にもほしいね」と言ってくださる方や「自分たちもこれを目指しているんだよ」と言う NPO の方もいらっしゃいました。

今回は東日本大震災の復興に少しでも役立ちたいと、いろいろな方に相談しました。小金井市には「東日本大震災復興応援プロジェクト」があつて被災地へのバスツアーを企画したり、毎月十一日には被災地の物品を販売する活動を続けています。「お金を寄付するより物を買ってあげた方が応援になるよ」というアドバイスを受け、復興応援プロジェクトで扱っている「おせんべい」をおみやげとしてお持ち帰りいただきました。被災地にも七七、二三〇円をお支払いすることができました。

受付や喫茶は地元会員の有志と「劇場講座」の皆さんで担当していただきました。本当に多くの方に支えられての公演でした。ありがとうございました。
(制作・木下美智子)

応援の花束が届きました。



被災地みやぎから応援しています
千秋楽までがんばってけるな！
宮城ふるさとプラザより

「出会いの街」

『出会いの街』は二〇〇六年上演の『小さなカフェで』が原型ですが、現代劇は社会状況にマッチしていなければ成り立ちません。すでに七年もたっており、二〇一一年の東日本大震災でカフェに出入りする人々の問題意識も大きく変わっています。そこで全く新しい作品に書き直すことになりました。

早速地域世話人会の人たちの話を聞きながら、最近の街の問題意識を織り込んだ話に構成しました。また、現代座の芝居づくりは俳優の個性に合わせるのが原則ですから、新しい出演者と話し合いながら台本を書き直すことにしました。九人の出演者の内、初めて現代座の舞台に立つ俳優が四人いますから、二月、三月は読み合わせをしながら



ら、社会状況の変動、登場人物の性格などを話し合い、その都度台本は書き直しました。作家の一方的な書き下ろしではなく、作家と地域世話人と俳優の合作です。四月は稽古と併行して舞台装置、小道具の製作をすすめました。そして五月十六日、幕を開けました。無我夢中の半年間でした。

各回の入場者一覧

公演日	開演	入場者
5/16(木)	夜	47
5/17(金)	昼	60
	夜	40
5/18(土)	昼	58
	夜	46
5/19(日)	昼	82
5/20(月)	昼	67
	夜	65
5/21(火)	昼	66
		531

アンケートは302人の方が書いてくださいました。全入場者の57%になります。これも今までにない数なのでびっくりしています。

『出会いの街』の舞台に立つて

矢川千尋

小金井は私が産まれてから一番最初に住んだ街です。その頃は自分の住む街にこのような劇場があることを知りませんでした。随分と大人になってから劇場の存在を知り、足を運んだのは約3年前。

現代座での私は、観客から始まり、劇場講座の参加者となり、「出会いの街」では出演者という立場になりました。立場は全て違うのですが、共通している事があります。それは「幸せな時間」です。

観客でいた時も感動したり共感したり前向きになれましたし、劇場講座でもいろいろ刺激をされワクワクドキドキしました。そして今回「出会いの街」に出演してこの「幸せな時間」を感じた時、理屈ではなく、

舞台はお客様を含めた全ての人で出来上がり完成するものなんだと実感する事が出来ました。

勿論今までもそう思っていましたし、感じてまいりましたが、「出会いの街」では心底実感できたのです。舞台の本番中に客席から伝わる熱や息づかい、笑い声や泣き声。時折参加している気持ちになり声をかけてくださったり。舞台と客席が一体となり一緒に作り上げる、あのなんとも言えない空気。

言葉ではうまく説明できないのですが、あの高揚した空気は神がかっているようにも思えました。人はそれぞれ違う価値観や哲学を持って生きていますが、それでも一体になれる劇場という場所は本当に凄いです！

役者という立場で、この場所を維持し守っていかなければという使命感が、今回の舞台に出演したことにより私の中に芽生えたことは間違いないです。

「出会いの街」では本当に素敵な出逢いが沢山ありました。あたたかいお客様、心強い共演者、頼りになるスタッフの方々、懐の深い演出家。なんて賢い、そしてなんて幸せな時間を頂いてしまったのでしょうか。この舞台は私に沢山の宝物をくれました。今回関わってくださった全ての方々に、心から感謝いたします。本当にありがとうございます。そしてこれからもよろしく願います。



アジアの子ども支援ボランティア・純子を演じる
矢川千尋

NPO現代座を支える人々

第十二回 狩野和太郎さん

記 武本英之

狩野和太郎さん
(かのうかずたろう)

サシガネ、墨壺、チヨウナ：と言っても一般人には分からないかも知れない。サシガネはL字型の曲

尺、墨壺は印を付ける墨と糸、チヨウナはクワ形の手斧。大工さんの道具の三種の神器である。大工さんにとって道具は命。一仕事終わるとカンナの刃は砥石で磨いて大事に保存するのが当然の習わしだ。ところが今、この道具の扱いに異変が起きていらい。機械化が進んで道具を使わなくなり、目立てヤスリなどは新品を買った方が安上がりだから、使い捨ての世界になっているという。

「何でも使い捨てで、道具を使いこなせる職人のプロがなくなりましたねえ」と仰るのが、小金井市で建具屋を開く狩野和太郎さんだ。現代座で五月に上演された「出会いの街」で登場する昔気質の建具職人・五十嵐さん(黒澤義之さん演じる)のモデルである。「子供が大きくなり、二段ベッドが邪魔で捨てようとするから、加工してベッドを二つにしてあげたんです。手を入れると立派に見えるんです」。こんな狩野さんの話が脚本を練っていた木村快さんの作家精神を刺激したようで、狩野さんらしき群像が描き込まれた。

狩野さんは昭和三十一年に十六才の時、群馬県吾

妻(あがつま)郡から「大工をやりたくて」上京した。訓練所を経て縁あって新宿にある建具屋の親方に年季奉公に入った。十九才だった。「ノコギリが五千円の時代、一月二千円のお小遣いで」朝から晩まで親方の背中を見て仕事を覚えたという。「時代の変わり目で兄弟子が辞めていく中、私だけが残って、徒弟制の最後の弟子でした」と振り返る。

そんな狩野さんも二十七才で独立、小金井市東町で出身地に因んで「吾妻」(あづま)と名付けたお店を開業。一度も店の宣伝をすることなく、一件一件の仕事の確かさが使ったお客の口コミで伝わり、商売が軌道に乗り、早四十年以上この道一筋できた。二年前、社長業を長男に譲った。一方で工務関係者を集めて「工コハウス研究会」を立ち上げ、環境対応型のカビに負けない素材を開発するなど時代の先読みも怠らなかつた。

七十二才になられた今は、後進の育成にも力を入れ、建具協同組合が行う訓練校で四時間、若い職人志望を指導している。物言わぬ棟梁の技術を盗み見て自らの技を磨いてきたであろう方だけに、さぞや、もの作りの秘訣をここで学べるのでは、と思いきや、「私はここでは昔話しかしません」と仰る。「若い人は確かにもの作りをやりたくて来ています。私は『ものを作るには道具を使わないとできないんだよ』と言っんです。今は何でも機械でできて道具も使い捨ての時代ですから、道具に時間を割くことをしなさい。道具の大事さを教えるには自分が辿った昔話を聞かせるしかないんです。その上で手から覚えていく。本気で話すと若い人は一生懸命聞いてますね。希望は持てます。もの作りが難しい時代になりましたが、頑固親父のように昔気質の話を繰り返すことです。それが我慢強いほんものの職人を育てる近道だと思っっています」という。

狩野さんと現代座との出会いは「もくれんのうた」を観てから。公益社団法人武蔵野野法人会の仲間で現代座

会員でもある山本将尋さん(つくば観光交通)に誘われたのがきっかけ。「感動しました。お芝居を観て、子供の頃行った芝居小屋で、お年寄りが涙を流して感動していた姿を思い出しました」と、昔懐かしき芝居が目の前に展開されているのを観て現代座のファンになった。以来、現代座の芝居には必ず足を運ばれ、建具の材料を提供するなど舞台作りにも協力してくださっている。

なにより代表の木村快さんと夫人で俳優の木下美智子さんの人柄に惹かれたのも現代座に通う大きな要因に。とりわけ木村快さんは演劇の職人。片や狩野さんは建具職人。「快先生とは、一つことで百分かるといったツーカーの感じですね」と、職種は違えど職人同士、多くの言葉を必要とせずとも分かり合える感覚らしい。今では快さん主催の「SPレコードを聞く会」(毎月第四日曜に開かれる)の常連である。

「現代座のよさを多くの人に伝えていきたいと思っっています」と狩野さん。「小金井の人は現代座のことを知らなすぎる。法人会でもお話しして、いい事はみんなに伝えてあげたい」と現代座にとって心強いお言葉。「一緒に歌をうたえる広場、お年寄りの相談所のような場所に現代座がなれるといいと思います。特にお年寄りに行く所がなくて困っています。歌が好きなら、ハーモニカが得意な人、民謡が好きなら、それぞれが仲間を集めてイベントをやって、仲間同士がネットワークを広げていく。大きな会でなくていいんです。小さくても中身のある、顔の見える、ほんものの活動ができることが大事です。そんな仲間が集える場所に現代座がなっしてほしい。私もできる限り現代座を応援していきたい」と惜しみないエールを送る。感謝。(了)

※このシリーズを担当している筆者の武本英之さんは専門誌「東京交通新聞」編集局長、NPO現代座正会員でもあります。

「蒼い空・友の呼ぶ声」

長野県公演報告

清内路公演を終えて

事務局長 原 京子

私達の住んでいる清内路は、長野県の西南部に位置し、四年前に隣村の阿智村と合併するまでは人口七百人余の小さな村でした。今回、現代座の演劇公演を主催した「清内路きかまい会」は、清内路を中心とした住民主体の手作りの会で、誰かの『こんな事をしてみたい』の思いを皆で実現する実行委員会です。



清内路きかまい会のみなさん 前列左端が原京子さん

二〇〇四年に清内路の山奥にある国の天然記念物「小黒川のおおまき（ミズナラ）」の大枝が折れ、その枝でコカリナという楽器を制作した事がきっかけで、コンサートを開催するようになり、毎年コンサート等を開催して来ました。八回目の今年は、六月二日清内路小学校体育館に於いて、現代座の演劇「蒼い空 友の呼ぶ声」を開催することになりました。

昨年、この劇の音楽を担当されている福沢達郎さんから、松本市での「蒼い空」公演へのお誘いがあり、公演を観に行きました。福沢さんときかまい会で企画したコカリナコンサートで知り合い、今も会のメンバーとの交流が続いています。また、きかまい会には、数年前に飯田市で行われた現代座公演の実行委員会に参加した人も数名いて、『いつかは清内路にも現代座を呼びたい』との思いがありました。

そんな繋がりがから、『ぜひ清内路の公演を企画し、そこでは福沢さんのピアノ生演奏で上演して貰いたい』と思いました。その思いをきかまい会で提案し、今年の企画として了承されたのです。

公演会場は小学校の体育館に決まり、客席を作るため、地区内にある座布団・椅子・コンテナ・畳等々、使えそうなありとあらゆる物をかき集めました。

一番の苦労はやはりチケット売りでした。人口六百人の地区で、三百枚近いチケットを売るという事は想像以上に大変な事です。実行委員の中には現代座を知らない人達も大勢いて、とにかくその人の信用のみでチケットを売り歩きました。まさに山田洋次監督の映画「同胞」の一コマのようでした。

現代座の皆さんは公演前日に到着され、全員で会場の準備を行いました。舞台監督の寺崎さんの指導のもと、階段状に客席を組み上げると、普段の体育館がまるで劇場の様に変身します。会場に来て下さるお客様が、どんな驚きの表情をするのかも楽しみでした。

そして迎えた公演当日。客席は満員となり、待望の福沢さんのピアノ生演奏と共に演劇が始まりました。劇の合間合間に心地よく流れてくる生ピアノは、主人

ピアノによる劇伴奏 福沢達郎



公山村の心の変化をいきいきと伝えてくれます。終幕に近づくにつれ、自分の心も蒼く澄みわたって行きました。やっぱりこの劇は、福沢さんの気持ちもせて生ピアノでやるべきだと思います。

戦争中、阿智村からは満蒙開拓団として、多くの方々が家族で中国に渡りました。そういう苦勞をされたお年寄りも会場にいました。また阿智村は、中国残留日本人孤児の肉親探しをし、孤児たちの帰国実現の為に尽力された山本慈昭さんが住んでいた村です。私の同級生にも、残留孤児の息子さんがいました。主人公の山村と、自分の身近にいるそういう方々の人生とも重なりました。

小学生から戦争を経験したお年寄りまで、様々な年齢の方が集まり、それぞれの心の中に、「蒼い空」が刻み込まれた事と確信しています。こういう文化活動は、特にやらなくても日々の生活に困るわけではないけれど、地域内外の人達が一緒に取り組む事で、達成感だけではなく、普段の生活の中ではなかなか気付けなない事に気付いたり、思いがけない出会いがあったりする事が楽しさであり、醍醐味でもあったりします。

現代座の吉野さんが、「同じ人同士でも、出会えばまたきつとそこには新しい何かが生まれる」とおっしゃっていた事が忘れられません。いつも生活を共にしている地域の方々と、また新たな何かを生み出す事も今後の楽しみになりました。現代座の皆さんとの出会いを、今後も大切にして行きたいと思えます。ありがとうございました。

新しい奇跡に挑戦

佐久公演実行委員会事務局長 半田小百合

六月三日、「蒼い空 友の呼ぶ声」佐久公演は、たった八名の実行委員でお手伝いさせていただきました。思えば十年前「虹の立つ海」で初めて現代座に関わらせていただいた時から「無謀な挑戦」と言われたものですが、今回もそれに近かったかもしれません。しかし、「無謀な挑戦」がやがて公演が始まるころには「奇跡の挑戦」に変わる、そういう貴重で素晴らしい体験を今回もさせていただきました。

現代座の実行委員は、吉野さんの掛け声から始まります。そしていつもいつも時代を先取りしているかのようなテーマに、どうしてもこのお芝居を大勢の人に観てほしいと強く思わされるのです。今回のテーマも、戦争体験を乗り越えて新しい生き方を見つける老人の物語の中に、平和のこと、老後のこと、世代間でつながっていくことの大切さなど、気がつかされること



実行委員の皆さん、前列右端が半田さん

と満載の素晴らしい劇場で、アンケートもたくさん感動が綴られています。「無謀な挑戦」を「奇跡」に変えるには、様々な葛藤を乗り越えなければなりません。お誘いの声掛けは何と言っているのか、赤字になつたらどうしよう・・・そんな

葛藤の中、十年前に気がつかされた大きな学びは「人事を尽くして天命を待つ」ということでした。これは、今でも私の座右の銘となりました。赤字になつたって死ぬわけじゃあるまいし、それよりもガランとした客席でお芝居が盛り上がりたことの方が問題。そう考えたら、すつと肩の力が抜けて、いい劇場にしたいという純粋な想いで走りまわることができました。純粋な想いは、必ず伝わる。想いはかければかけるほど、さらに伝わる。同じ想いの仲間分だけ倍増していく。そして、結果は後からついてくる。

今回の実行委員会も、ダイジェスト版を聞かせていただいたり、取材を受けたりしているうちに内容の理解度がどんどん深まって、自分たちのできることをやりきった実行委員会でした。公演が終わって、会場から出てくる観客のみなさんの満足げな表情に出会え、やってよかったと心から思うのでした。

今回、初めて実行委員に参加して下さった方が三名いらつしやいました。市会議員選挙に出馬の中、直前までフルパワーで頑張ってくださいました飯島さん。仕事がお忙しい中、実行委員会でごやかな笑顔を見せて下さった小玉さん。積極的に学校関係へお手紙書いてくださった堤さん。本当に初めてだらけの様々なことを一生懸命やっていたいただきました。

その他のメンバーは、会計で細かなまとめをしてくれた若菜ちゃん。吉野さんのお話に感動して途中から参加してくれた角田さん。色々な団体に顔をきかせてくれた望月さん。そしてそ



して、誰も引き受け手がなかった実行委員長を快く引き受けてくれた工藤さん！「約束の水」に続く二回目の実行委員長として、いてくれるだけで心強い存在でした。それから、実行委員こそ八名でしたが、お声掛けをして下さったみなさんに感謝感謝でいっぱいです。

現代座のお手伝いをさせていただいたたびにハツとすることがあります。人と人がつながりあう地域づくりの大切さ。そのためだけに地道な活動を続けている現代座にいつも感動するのです。そして私も初心に帰って、心を込めて関わっていきたくて思うのでした。そんな現代座の公演も、地方公演が難しくなってきたことを聞いて、私も実行委員を二つ返事でお引き受けできなかったことを心苦しく感じています。終わってみるとまたやりたいな...と懲りずに思うんですけどね。これからもずっと現代座を応援していきます。またお会いできる日まで。

「友の呼ぶ声・蒼い空」

八十の坂を越した太田は特攻隊最後の生き残りという過去を持つ。敗戦から六十年後のある日、書棚の奥で古い辞書を発見する。戦友から家族への形見として託されたものである。戦友は神戸の出身だった。すでに震災から十年がたっていたが、太田は人生最後のつとめとして、神戸へ旅立つ。

太田は偶然出会ったボランティアの若者たちに助けられながら、神戸の街を探し歩くが、戦友の妹はすでに震災復興住宅で亡くなっていた。ひとり夜空に向かつて友に詫言ひたとき、空の彼方から「おれたちが生きた無残な青春を、今の時代に伝えてくれ」と言う友の声が聞こえる。

「遠い空の下の故郷」 ハンセン病療養所に生きて

二〇〇一年に熊本と鹿児島へのハンセン病療養所を訪ねて、たくさんの方のお話をきかせていただきました。大変なシヨックを受けると同時に、強く、やさしく、ひたむきに生きる姿に心を揺すぶられました。何度もお訪ねするうちにお友達になった二人の女性が話してくださったことを「語り」として皆さんに伝えていく活動をコツコツと続けています。



五月一五日（水）墨田区・圓通寺 大施餓鬼会法要
圓通寺はスカイツリーのすぐそばにあるお寺です。モダンなコンクリートの建物で、本堂にはグランドピアノがあつて、今回は吉野由美子のピアノ生演奏で語ることができました。

圓通寺のホームページより

現代座はハンセン病への偏見と差別の解消に向けて活動をなさっている。

NPO法人現代座と出会ったのは、平成二十二年十二月の事でした。現代座の公演「遠い空の下の故郷」は、大本山永平寺、總持寺を始めとしていくつかの宗門寺院で行われており、好評を博しているとのこと。しかし、実際に拝見するまでは、悲惨さだけを伝える、お涙頂戴の語り劇だと思っていました。

ところが、演者の木下さんは単なる演者ではなく、療養所に暮らす阿部さんであり、山口さんそのものでした。差別を受けながらも、人を恨むことなく、毎日の生活を大切に、不自由な夫と共に精一杯生き、離れた家族を想う。その純粋な心が私たちに感動を与えました。

どんな差別も同じですが、差別を本当になくすには、道徳的な判断だけでなく、差別がどうして起こったのか、なぜ気づかずに過ごしてきたのかを、私たち自身の問題として考えて見る必要があります。

ハンセン病の問題を考えることは障害者や社会的弱者の問題を考えることと全く同じで、社会の中で弱者が他の人々と同じように生活し、活動することが社会の本来あるべき姿であるという考え方を探っていく道だと思えます。

住職 佐藤大英

圓通寺ホームページより転載させていただきました。

木下美智子

力行会で「アリアンサ移住地」の講座

日本力行会の要請で、木村快は力行会の研修生としてブラジルから来ている三人の青年に「アリアンサ移住地」について知って貰う講座を月一回、四回の予定で始めました。

日本力行会は明治三〇年に設立された青年支援ボランティア組織で、海外に多くの青年を送り出してきました。現在は国際交流団体として、世界各国の留学生のために寄宿寮を提供しています。

ブラジルから来た青年には、せめて力行会がつくった「アリアンサ移住地」の歴史はきちんと覚えて帰ってほしいと、この講座が企画されました。

第一回目はまだ日本語を勉強中の若者ですから、どこまで話を通じるのか、お互いにジェスチャー、筆記を併用しながら、地図を広げて、それぞれがサンパウロ州のどこからやってきたのか、それぞれの生い立ちなどを語り合いました。



力行会には通訳のできる職員がいるので、とりあえずアリアンサの資料を渡しておきました。第二回は質問に答える形になります。受講生は左から垣花花恵・アナクララピレスさん、伊藤ラモス・ヴェニシウス君、志村セイジ・ダニエル君です。

わたしの近況

「共生の大地・アリアンサ」について

木村 快



『共生の大地・アリアンサ』がやっと出版の運びになりました（八面を参照してください）。

「アリアンサ」とは協同・約束を意味するブラジル語です。大正時代、協同組合組織で理想の村を建設しようという日本人によって開設されたためらしい移住地で、今でも日本の伝統文化を大切にし、日本語の通じる村です。けれど、日本政府の移住政策に批判を持ち、抵抗したため、公的ブラジル移住史から抹殺され、村の生い立ちがわからなくなった村でもあります。

一九九四年の「もくれんのうた」ブラジル公演ではアリアンサ村の方々に大変お世話になり、何かわれわれでお役に立つことがあればということから「アリアンサ史研究会」を発足させました。一九九七年からは「ありあき通信」を年一回発行してきました。その目的はアリアンサの現状を紹介するだけでなく、日本

政府によって抹殺されたアリアンサの歴史資料を発掘するためでした。

わたしは専門家の協力を受ければ、何とかなると考へ、アリアンサ史の復元に協力することを約束したのですが、ものの数年もたたないうちに、それはほとんど不可能に近いことを知りました。

二〇〇八年、ブラジルでは「日本人移民百周年」を記念して祝いましたが、日本側では「日本ブラジル交流年」と呼び、マスコミでも「移住」が日本の国策であったことについてはいっさい触れていませんでした。なんとか大まかな歴史をまとめて発表したいと思ったのですが、「公的な裏付け資料がない限り、歴史とは言えない」と言われ、さらに五年がたちました。

今度やっと昭和二年から六年にかけての外務省の公電資料を目にすることができ、やっとアリアンサの歴史を資料で裏付けることができました。専門家のような書き方はできないので、わたしが迷い歩きながら調べた範囲の道のりを素直に書きました。研究者に読んで貰いたいのではなく、わたしと同じ、本当のことを知りたい日本人に読んで貰いたいと思います。

わたしは忘れない（「共生の大地・あとがき」より）

一九九四年にユバを訪ねたとき、ユバ農場の矢崎氏から農場史をまとめたのだが、アリアンサについての公的史料が見つからなくて困っていると言われ、それなら日本で専門家に相談してみようということと別れた。以来、いろいろな人に相談してみたが、戦前の移住資料は散逸してしまい、日本には移住史の専門家もいないという。移住博物館でも「戦前の資料は扱っていません」とのこと。

国策で二〇万人以上もの移住者を送り出し、その子弟を二〇万人以上も労働力として導入していながら、

そんな歴史は知りませんという国があるのか。それより、なにより、そんなことも知らないで「日本ブラジル通商条約百周年記念」のタイトルを掲げてブラジル公演に出かけたわれわれは、まさに恥ずかしい日本人の典型だった。

ブラジル公演では一二の都市とサンパウロ州奥地のアリアンサ村で「もくれんのうた」を上演した。移住者の帰郷を扱ったシリアスな会話劇なのに、俳優の一挙手一投足に人々は爆笑し、歓声を上げていた。それは舞台を鑑賞しているのではなく、祖国からはるばるやってきた同胞との再会だったのだ。

終演後、「わたしたちのことを忘れないで欲しい」と目に涙を浮かべながら俳優たちの手を握って帰っていく人々。アマゾンのベレン市では二日がかりの船旅でやってきた人々もあり、かつて一九六〇年代に角田房子が毎日新聞に連載した『アマゾンの歌』のモデルとなったトメアスーからは、貸し切りバスで一〇時間かけて多くの人がかけつけてくれた。

わたしは専門家ではないけれど、一人の日本人として、「あなた方のことは決して忘れてはけません」と伝えたかった。そんなわけで、消された移民史を掘り起こそうと、『ありあき通信』を発行しながら、ユバとわたしとで少しずつ戦前の移住文献を調べ、移住に関係のある人々を訪ねて歩いた。ブラジルでも、日本でも、ほんとうに多くの方々が協力してくださった。

もうあれから一九年もたち、特に戦前の移住にかかわられた方々はほとんど亡くなられている。大変不十分なものではあるけれど、追悼の意味も込めて、とにかく「わたしは忘れない」と言い続けるためにこれを書いた。

みなさん、ほんとうにありがとうございました。

二〇一三年七月

木村快

会員の皆さまへのお知らせ

「出会いの街」公演 DVD

会員の皆様へのお礼にさしあげます。

遠隔地で現代座の公演に来られない会員の皆様や、都合がつかなくて公演を見られなかった会員の皆様に、せめてDVDで見えていただけたらと思います。公演を見てくださった会員の方にも、勿論さしあげますので、お気軽にお申し込みください。送料も無料です。

(会員以外の方でDVDが欲しい方は1000円のご寄付をお願いします)

共生の大地・アリアンサ

ブラジルに協同の夢を求めた日本人

木村 快著 同時代社刊 (A5版 352頁ソフトカバー)

ISBN 番号 978-4-88683-751-6

「共生の大地・アリアンサ」は8月中旬に出版の予定です。

定価は3500円+消費税です。書店でもネット通販でも購入できます。現代座会員の皆様には是非お読みいただきたいので、現代座に直接お申し込みいただければ特別割引価格3000円(消費税込み)でお渡します。郵送する場合には送料300円が別途かかります。

「現代座レポート」に振込用紙を同封いたしますので、お申し込みください。まとめて購入してくださる方、まわりに広げてくださる方は、ご連絡ください。

現代座 042-381-5165 木下美智子 michiko@gendaiza.org

不登校からの高校・大学合格実績多数!

家庭教師 あなたの道をさがそう!

無料 体験授業受付中 詳しくはお電話またはWebで!



成績不振、発達障害 ADHD・LDアスペルガー対策

不登校・発達障害の家庭教師

TOS家庭教師センター

住所 東京都新宿区北新宿 1-29-11 ホームページ <http://www.tos-kc1.com>

☎ 0120-12-6446

この広告は、協賛会員の中村利治さんが「少しでも現代座の活動支援になれば」と出してくださいました。中村さんは現代座の中村保好と同じ群馬県旧白沢村出身の方です。

「出会いの街」のチラシに応援広告が載っているのを見て、自分も協力したいと思ってくださったのです。中村さんは、不登校や中退で困っている人に家庭教師を派遣するお仕事をされています。ご協力ありがとうございました。

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費 (現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円 (1口以上)

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座